

センサスデータからみたオーストラリアにおける多文化社会の形成

堤 純*・吉田道代**・葉 倩瑋***・筒井由起乃****・松井圭介*

*筑波大学生命環境系, **和歌山大学観光学部, ***茨城大学人文学部,

****追手門学院大学国際教養学部

本稿は、多文化社会の特徴をもつオーストラリアを対象に、移民の増加プロセスおよび社会経済的な特徴を把握することを試みたものである。1970年代に白豪主義が撤廃されたことは、オーストラリアが多文化社会へと舵を切る大きな契機となった。シドニーを対象に移民の増加をみると、仕事では英語を使うものの、家庭では英語以外の言語を使う人口の増加が著しい。シドニー大都市圏では、増加の著しいアラビア語人口やヴェトナム語人口などは、ポートジャクソン湾の南側の低所得者の多い地域に集中する傾向にある。一方、標準中国語や広東語を話す人口は、大多数は低所得者の多い地域に集中するものの、同湾の北側に位置する高所得者の多い地区にも相当数が進出していることがわかる。国勢調査のカスタマイズデータを分析した結果、中国系やインド系の移民は、シドニーに多く住む他のエスニックグループに比べて、学歴や所得の面で高い傾向が確認できた。

キーワード：シドニー、国勢調査、カスタマイズデータ、エスニックグループ、GIS

I はじめに

オーストラリアは、広大な国土を効率よく管理する必要性から、諸外国に比べて空間データの整備・管理が進んでいる。オーストラリア統計局（以下、ABSと略記）がかなり以前から国勢調査データの電子的な公開に取り組んできていること、また比較的安価、かつGISソフトウェアとの互換性も優れたデータフォーマットでのカスタマイズデータの提供についても堤（2012）や堤（2013）において紹介してきた。こうしたオーストラリアの統計データの先進性についての詳細はそれらを参照されたい。

本稿は、統計の整備およびGIS（地理情報システム）との連携では最先端の国の一つであるオーストラリアを対象に、同国最大のシドニー大都市圏（2011年の国勢調査時の人口は439万人）を対象として、詳細な統計（国勢調査のカスタマイズデータ）から様々なエスニックグループの居住分布を示す地図を作成し、大都市圏内で進行する多

文化社会の現状把握を試みたものである。

使用したデータは、オーストラリア統計局（以下、ABS）の発行する2011年国勢調査データの公開サービス（有料）の機能の一部である「テーブルビルダー」¹⁾のデータである。これにより、大都市圏全域の小統計区であるSA1²⁾（Statistical Areas Level 1）を対象に、民族的な出自、宗教、所得、学歴、家庭で使用する言語や所得、通勤に使用する交通手段等に関する詳細なデータが取得可能となった。また、単一属性のみならず、「使用言語」（例：家で中国語を話す）と「居住年数」（例：2000年以降の来豪者）というような2種類以上の属性をクロスさせたデータも、特定の大都市圏や都市、さらには任意のスケールの地区に対して入手可能である。

II シドニー大都市圏におけるエスニックグループ別の居住分布

オーストラリア全土の人口は2011年の最新のセンサスによれば約2,150万人である。しかし、

オーストラリアがまだ白豪主義を堅持していた1969年には1,226万人、グローバリゼーションによる都市再開発ラッシュが訪れる前の1989年には1,681万人にすぎなかった。1969年からの40年余りで約1.8倍に、また、1989年からのわずか20年余りで500万人も増えた人口の多くは上位の5大都市圏に居住している。こうしたオーストラリア全体の人口の急速な増加に大きく寄与してきたのは移民である(図1)。オーストラリア人の大多数は、過去約200年間に200ほどの国と地域からやってきた移民(migrant)か、その子孫である³⁾。毎年25万人程度増え続ける人口の約半分は移民1世の増加による直接的な人口増加であり、残りの半分を占める自然増加においても、オーストラリアで生まれた移民2世・3世の増加

といった間接的な影響も大きい。1950年代頃までは、オーストラリアへの移民の出身地の大多数はイギリスとアイルランドからであったが、それらは1960年代頃から急減した。それに代わって、1950年代から1960年代にかけて東欧系(とくに、旧ユーゴスラビア系)、イタリアやギリシアなどの南欧系移民が急増した。1970年代に白豪主義が撤廃されると、インドシナ難民を含む東南アジア系移民が急増した。1990年代後半にかけては移民の出身国はさらに多様化し、インドやスリランカなどの南アジア、中東諸国、中国・韓国などの東アジアからの移民も増加した。2007年以降には中東諸国やアフリカ諸国からの移民も増加している。人口の自然増加率は停滞傾向が確認できるが、近年では移民による人口増加率が再び拡大

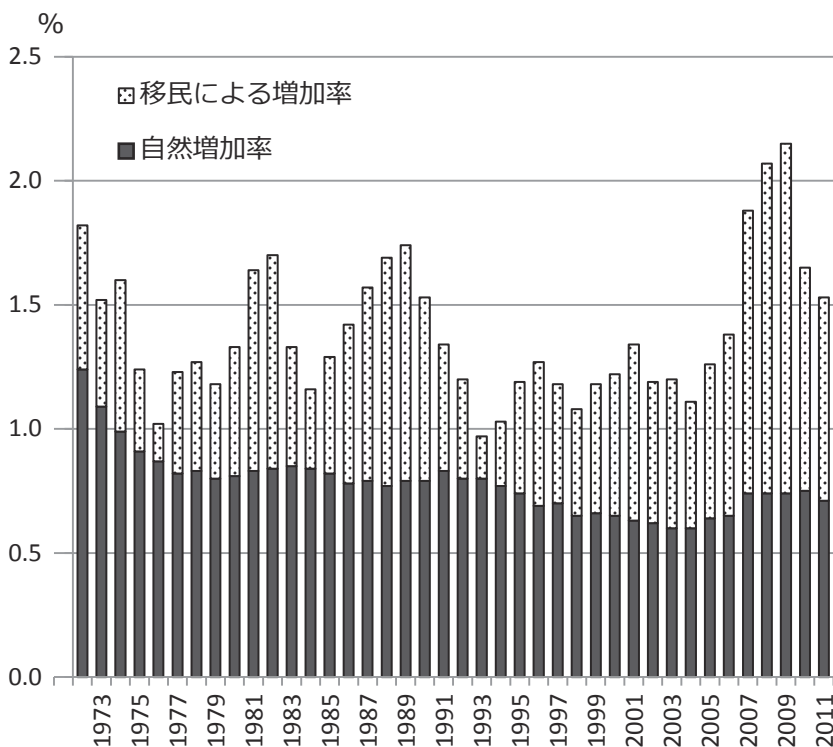


図1 オーストラリアの人口増加率(1972~2011年)

(オーストラリア統計局のデータをもとに作成)

しており、年によっては20万人以上というペースで移民が増加し続けているのが現代オーストラリアの特徴である。

具体的にシドニーの多文化社会の現状を把握するため、ABSの提供する各種のデータの中から、「家庭で使用する言語⁴⁾」に着目した(表1)。この表によれば、シドニー大都市圏の場合、2011年の総人口の約62%は英語のみしか話さない。しかしこれは、全豪平均の同76.8%と比べると大幅に低く、シドニーの多文化性の証左でもある。残りの約40%弱は、家庭では英語以外の言語を使用しており、最も多いのはアラビア語(総人口の4.0%)、広東語(同3.0%)、北京語(3.0%)の順となっており、アジア・太平洋地域の中心都市としてアジア諸国とのつながりの強い様子が伺える。とくに、2001年～2011年までの10年間では、北京語を話す人口が急増した特徴を指摘できる。これらのエスニックグループのうち、特徴的な分布を示す六つのグループを抜き出して地図化したものが図2である。図2内の各図の中央やや東寄

りにCBD(中心業務地区≡都心)があり、CBDのすぐ北側をポートジャクソン湾の入り江が東西に延びている。シドニー大都市圏における社会構造を把握する上で最も重要なことは、高所得世帯が比較的に多い湾の北部と、逆に低所得世帯の割合が高い南部とのコントラストが強いことである。

まず、アラビア語を話す人口は、ポートジャクソン湾の南側に集中する傾向が強く、とくにCBDに西から南西20km程度に位置するグランヴィル(Granville)やマウントルイス(Mt. Lewis)、バンクスタウン(Bankstown)に集住域が確認できる。これらの集住域は、産業用の小空港であるバンクスタウン空港とその周りに多くの工場や倉庫が広がる雇用機会も比較的多い地区とも重なる。来豪時期が他の移民よりも近年の傾向が強いアラビア語を日常的に使用する移民グループが、これらの地区に多くみられる。こうした地区では、ハラールショップに加え、中東系の調味料、香辛料、さらには中東独特の衣装を販売する店舗も増加傾向にある。

表1 シドニー大都市圏における家庭での使用言語(2001, 2006, 2011年)

	2001年		2006年		2011年	
	人口(人)	割合(%)	人口(人)	割合(%)	人口(人)	割合(%)
アラビア語	142,453	3.6	161,060	3.9	178,594	4.0
北京語	63,739	1.6	96,608	2.3	133,639	3.0
広東語	116,341	2.9	125,057	3.0	131,868	3.0
ヴェトナム語	65,998	1.7	72,654	1.8	84,952	1.9
ギリシア語	83,915	2.1	80,101	1.9	80,681	1.8
イタリア語	79,612	2.0	71,643	1.7	68,384	1.5
タガログ語	40,123	1.0	44,225	1.1	53,378	1.2
ヒンドゥ語	27,284	0.7	36,986	0.9	50,694	1.1
スペイン語	44,615	1.1	44,571	1.1	49,741	1.1
韓国語	29,497	0.7	35,858	0.9	45,972	1.0
英語のみ	2,625,386	65.7	2,622,435	63.2	2,722,249	61.5
合計	3,997,321	100.0	4,148,575	100.0	4,429,035	100.0

(オーストラリア統計局のデータをもとに作成)

ヴェトナム系移民は、1970年代中盤の白豪主義撤廃後に最初に渡ってきたアジア系のグループであるため、他のエスニックグループよりも来豪年が古い傾向がある。ヴェトナム系移民の殆どはポートジャクソン湾の南側に集中している上、とくにCBDの西約30km、シドニーのCBDから鉄道で1時間強かかる地区に集住する傾向が顕著に確認できる。ヴェトナム系移民は約69,000人を数え、シドニー南西部のカブラマッタ (Cabramatta) (同地区人口の35%相当)、(カンリーヴェイル) Canley Vale (同29%)、カブラマッタウェスト (Cabramatta West) (同28%)、カンリーハイツ (Canley Heights) (同28%) などに集住している。このように、地区人口の1/3程度がヴェトナム系移民で占められる地区も珍しくなく、選挙の候補者はヴェトナム語話者でないと当選は難しいとか、ヴェトナム語話者向けの求人広告が多いなどの事例は枚挙に暇が無い。

次に、標準中国語と広東語を話す人口分布を見てみると、居住地区に関しては両者に明瞭な差はみられない。全体としてはポートジャクソン湾の南側、ハーツヴィル (Hurrtsville) や隣接地区のアラワ (Allawah)、シドニーオリンピックパーク近くのローズ (Rhodes) やバーウッド (Burwood) など、工場の集積する産業地区の周辺に多い特徴があげられる。その一方で、湾の北側で戸建て住宅の多いイーストウッド (Eastwood) やエッピング (Epping) などの高所得地区や、マッコリー大学近くのチャツウッド (Chatswood) の周辺にも標準中国語や広東語を家で話す人口が集まっている。これは、住宅価格が高く、高所得者層の多い地区にも、近年では中国系の移民が多く進出していることを示している。シドニー大都市圏では広東語を話す人々の方が来豪年が古く、2000年頃までは中国系の言語の中では広東語を話す人々が最も多かった。これ

は長らくシドニーと香港の結びつきが強かったことに一因があるが、2000年代を通して中国本土からの移民も急増したことから、近年では標準中国語を話す人々の方が多くなってきている。

家でイタリア語を話す人々の分布は、CBDの西側5～10km程度に位置するライカート (Leichhardt) 地区やファイヴドック (Five Dock) に顕著な集住域が確認できる。これらの地区は、他のエスニックグループの集住域よりもCBDに近い特徴がある。イタリア系移民の1世の多くは1950年代に来豪したケースが多い。ポートジャクソン湾最遠部のライカート周辺には湾岸沿いに造船工場をはじめ多くの工場が集まっており、慢性的な労働力不足に悩まされていた。1950年代に入りイギリス・アイルランド系の移民が急速に減った代わりに、白羽の矢が立てられたのがイタリア系をはじめとする南欧や東欧からの移民であった。湾岸部の重工業に従事する移民男性と、近くの縫製工場などで働く移民女性といった性的分業も顕著にみられたという (Burnley, 2001)。イタリア系住民の増加に伴い、イタリア系の食材店やレストラン、イタリア製家具の輸入販売店なども増加した結果、ライカート周辺は独特のイタリア人街が形成されるに至った。今日でも、「シドニーで最も美味しいピザとショートエスプレッソが楽しめる所は？」と尋ねれば、シドニー在住の多くの人々がライカートやファイブドック周辺を挙げるほどである。

韓国語を話すグループは、アラビア語を話すグループや他のアジア系言語 (ヴェトナム語、標準中国語、広東語) のグループに比べ、CBDから10～20km程度のストラスフィールド (Strathfield) など、CBDから比較的近く、公共交通を含めた交通アクセスのよい地区に集住する傾向が確認できる。

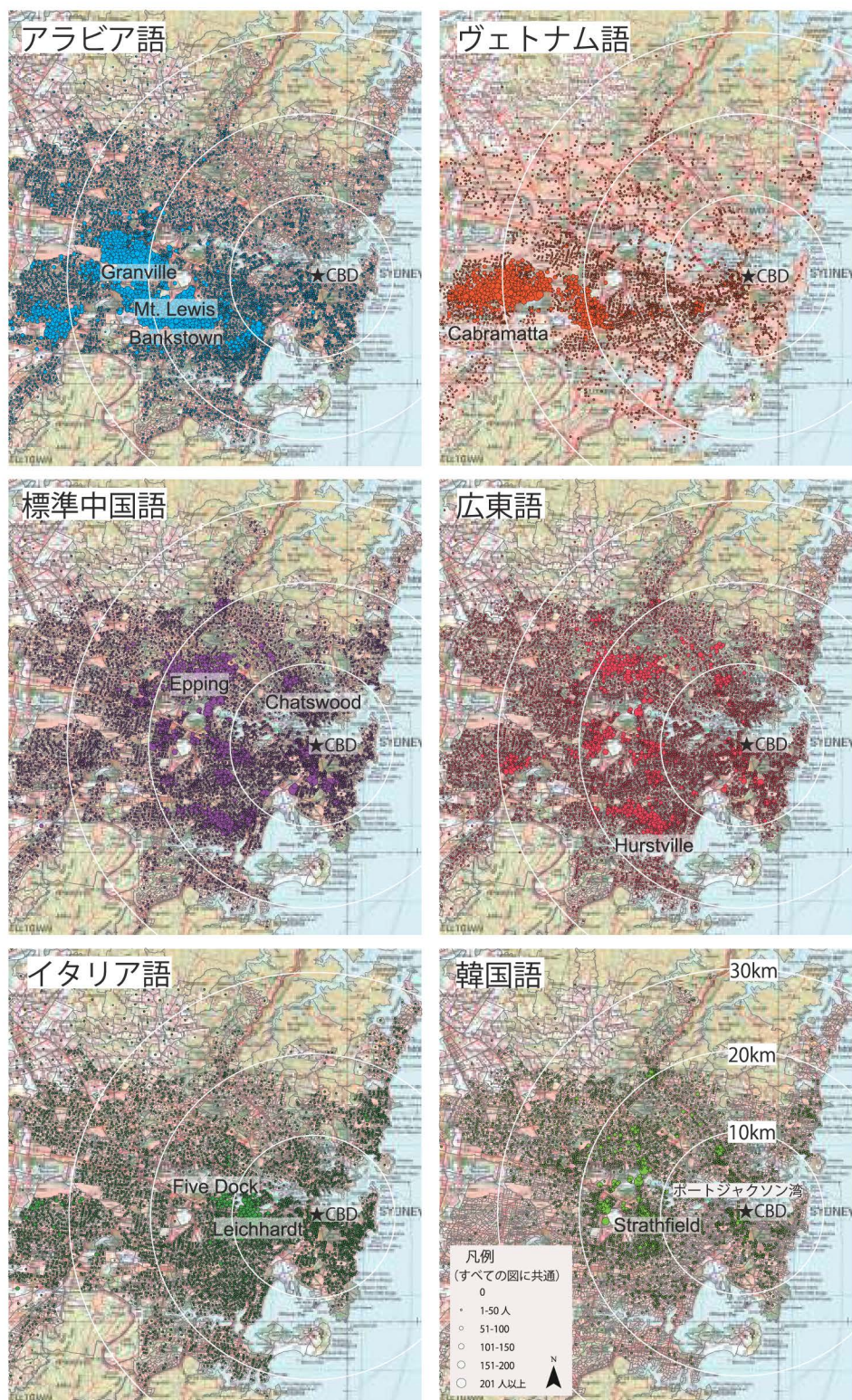


図2 シドニー大都市圏におけるエスニックグループ別の居住分布（2011年）
（オーストラリア統計局のデータをもとに作成）

Ⅲ シドニー大都市圏におけるエスニックグループ別の社会・経済的特徴

次に、ABSが提供するセンサスデータのうち、カスタマイズ機能「テーブルビルダー」を用いて、シドニー大都市圏（GCCSA）における使用言語別、所得、教育水準の属性をクロスさせたものが表2である。自宅で英語を使用する人々の所得水準をみると、大学卒業以上と専門学校以下の学歴に関わらず、週給2,000豪ドル（≒19万円、年収約1,000万円以上、@95円/豪ドル換算）以上のグループの割合がシドニー大都市圏の平均を上回っている。一方で、中国系言語からギリシア語まで英語以外の上位五つの言語グループについてみると、インド系を除く⁵⁾すべてのグループにおいて、大学に進学せず、週給600豪ドル以下の所得グループがシドニー大都市圏の平均よりもかなり多い。さらに興味深い点を挙げれば、中国系言語とインド系言語のグループは大学進学率が高く、週給600豪ドル以下の所得グループはもとよ

り、週給600～1,999豪ドルのグループ、週給2,000豪ドル以上のグループの割合もシドニー大都市圏の平均を大きく越えている。シドニーは多文化共生都市として脚光を浴びる機会が多いが、その中で、中国系とインド系が他のエスニックグループよりも突出してオーストラリア社会で存在感が大きいことがうかがえる。

テーブルビルダーの機能を使えば、理論上は、最小統計区（SA1）を対象に、複数の個人属性をクロスさせた地理行列が作成できる。これらのデータは、統計区コードをもとに統計区ごとの境界ポリゴンデータと比較的に容易に参照・結合させてGISソフトウェア上にインポートすることができる。しかし、シドニー大都市圏では、SA1の統計区数は10,000地区を越える。個人属性側をみれば、「アジア系言語」「南ヨーロッパ系言語」程度の大雑把な分類である1 Digit Levelでは12種類の言語グループ別の集計が可能であるが、これでは中国語と韓国語、日本語の区別もできない。やや詳しいレベルとして2 Digit Levelになると、言

表2 シドニー大都市圏における使用言語別・学歴別にみた所得状況（2011年）

主要言語	言語別人口 (人)	言語別割合 (%)	大学卒業以上			専門学校以下・その他※※※				合計		非回答 (%)	非分類 ※※※※ (%)
			週給600豪ドル未満 (%)	週給600～1,999豪ドル (%)	週給2,000豪ドル以上 (%)	週給600豪ドル未満 (%)	週給600～1,999豪ドル (%)	週給2,000豪ドル以上 (%)	週給600豪ドル未満 (%)	週給600～1,999豪ドル (%)	週給2,000豪ドル以上 (%)		
英語	2,732,437	62.2	3.6	9.8	5.3	30.2	24.5	3.2	33.8	34.3	8.4	2.6	20.8
中国系言語*	283,963	6.5	11.0	16.9	3.5	39.4	13.0	0.7	50.5	29.9	4.1	1.8	13.6
アラビア語	202,388	4.6	4.4	5.6	1.4	45.8	14.7	0.8	50.2	20.3	2.1	4.0	23.3
インド系言語**	150,390	3.4	13.8	20.9	4.4	25.9	14.4	0.6	39.7	35.3	5.0	1.9	18.2
ヴェトナム語	95,101	2.2	3.6	7.3	1.6	47.0	17.7	0.4	50.6	25.0	2.1	2.7	19.6
ギリシア語	80,776	1.8	2.3	7.0	3.2	45.1	23.9	2.2	47.3	30.9	5.4	3.7	12.6
大都市圏全体	4,391,683	100.0	4.8	10.2	4.3	31.6	21.1	2.3	36.4	31.3	6.6	6.5	19.2

（オーストラリア統計局のデータをもとに作成）

1) 表中の網かけは、大都市圏全体の平均を上回るもの。

2) *中国語系言語は、標準中国語（北京語）、広東語、客家語、呉語などの合計。

3) **インド系言語は、ベンガリ語、ヒンディー語、ネパール語などIndo-Aryan系の言語の合計。

（<http://www.abs.gov.au/ausstats/abs@.nsf/Lookup/2901.0Chapter6102011>）

4) ***その他には、非回答・非分類を含む。

5) ****非分類は、統計上Not applicableと分類されたもの。

語は63種類に分かれている。本稿では、この2 Digit Levelを採用した⁶⁾。

シドニー大都市圏を対象に、「家で中国語（標準中国語、広東語、客家語、呉語など）」を話す

人口をSA1のレベルで集計した後、来豪年のデータをクロスさせて再集計し、GISソフトウェアで地図化したものが図3である。なお、各統計区の総人口をもとに、家で中国語系の言語を使用する

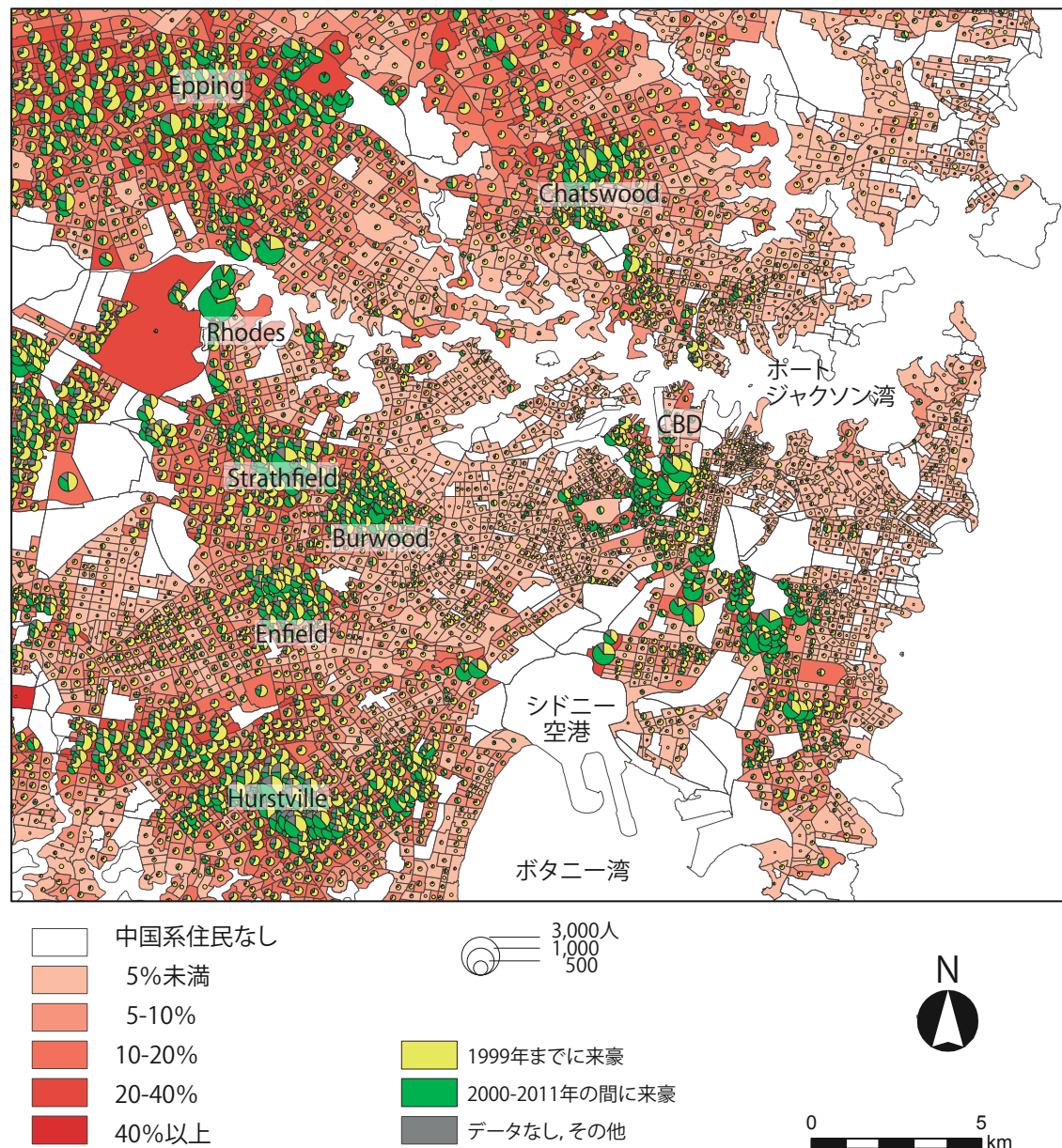


図3 シドニー大都市圏における居住年数別に見た中国系人口の分布（2011年）

（オーストラリア統計局のデータをもとに作成）

人口割合も算出した。この図は、図2でみた標準中国語人口と広東語人口を合算したものと総数は同じであるが、地区内の中国系人口の割合と、来豪年の情報がクロスさせてあるため、より詳細な特定が可能になっている。

図中に黄色（1999年までに来豪）と緑色（2000年以降に来豪）で色分けしたパイグラフの分布をみると、CBDの周辺では各地区の中国系人口の実数が多いことに加え、図中に緑色で示された2000年以降に来豪した「新しい移民」が多く集まっていることが見てとれる。CBDの周辺にはシドニー大学やニューサウスウェールズ大学、シドニー工科大学などが集まっているため、CBDの周辺に留学生が多く集まっていることも一因であるが、2000年以降に、CBD近くのダーリングハーバーやワールドスクエアなどの都心再開発によって多くのコンドミニアムや家具付きサービスタパートメントが大量に供給されたことも、こうした分布を説明する要因の一つである。また、図中には、ポートジャクソン湾の南側のストラスフィールドやバーウッド（Burwood）、エンフィールド（Enfield）、ローズなどにも、中国系人口の集住域が確認できる。一方、ポートジャクソン湾の北側の高所得地区であるエッピングの周辺をみると、全体として「黄色」すなわち、1999年までに来豪した居住歴の長い中国系人口が多い特徴が見てとれる。また、各統計区内に占める中国系人口も40%を越えるような高度な集積も珍しくない様子がわかる。

このように、テーブルビルダーの機能とGISを組み合わせることにより、「中国系が集住している」という単一属性による分布だけでなく、どのような「中国系」集住しているのかに関して、より詳しい属性をクロスさせて、必要となる情報を独自に集計して地図化することも可能である。

IV おわりに

紙幅の都合上、本稿は一部のエスニックグループの居住分布を断片的に示したに過ぎない。しかし、可能な限り細かい統計区を対象にした詳細な統計を入手し、これらをGISと組み合わせて地図化することにより、従来の分析よりもよりピンポイントなテーマ毎の分析も可能となってきた。こうして描かれた各種の地図をもとに、多文化社会の諸問題を検討することは、きわめて現代的な課題であり、学術的かつ実用的にも有意義といえる。

【付記】

本稿は2012-2015年度科学研究費補助金「ネオ・リベラリズムの進展とアジア化するオーストラリア社会に関する人文地理学的研究」、基盤研究（B）（海外学術）研究代表者 堤 純（課題番号24401036）による成果の一部である。

注

- 1) ABSは2013年7月に、2011年実施のセンサスデータの公開を目的とするテーブルビルダーというオンラインサービスを750豪ドル（≒71,000円、1豪ドル＝95円で換算）で開始した（2009年8月にリリースされた2006年センサスを対象とした同製品は1,655豪ドル）。「表を作成する」というサービス名の通り、購入者が任意の統計地区ごとに任意の属性を自由に組み合わせることができる。また、すべてのデータ利用がオンライン化されている上、アクセス回数に制限はない（堤、2014）。
- 2) SA1は、オーストラリアの国勢調査では最小の統計区であり、400人程度（先住民族の居住区周辺では90人程度）で1つの統計区を構成している。
[http://abs.gov.au/websitedbs/D3310114.nsf/4a256353001af3ed4b2562bb00121564/6b6e07234c98365aca25792d0010d730/\\$FILE/Statistical%20Area%20Level%201%20-%20Fact%20Sheet%20.pdf](http://abs.gov.au/websitedbs/D3310114.nsf/4a256353001af3ed4b2562bb00121564/6b6e07234c98365aca25792d0010d730/$FILE/Statistical%20Area%20Level%201%20-%20Fact%20Sheet%20.pdf)（2015年5月26日閲覧）
- 3) 2014年3月にABSから発表された報告書によれば、2011年の国勢調査結果では全国民のおよそ1/4に相当する530万人が外国生まれの「移民」（migrant）

である。この報告書によれば、「移民」の定義はオーストラリア以外で生まれた人をすべて含んでいる。したがって、この定義に基づく「移民」は、永住者はもちろん、長期滞在者、留学生などを含んでいる。ただし、国勢調査当日にオーストラリア国内に滞在していて、1年未満で帰国すると回答した者は「移民」には含まれていない。

<http://www.abs.gov.au/ausstats/abs@.nsf/Lookup/4102.0main+features102014#top> (2015年5月26日閲覧)

- 4) 一般に、「移民」を特定する方法としてはいくつか考えられる。外国出身者を便宜的に「移民」と定義する研究例は多く、確かに、外国出身者数を指標とすることは、一つのわかりやすい方法である。ただし、この方法では、移民の1世のみが集計の中心であり、オーストラリアで生まれた移民2世や3世の特定はできない難点もある。いずれにせよ、いわゆる「統計の限界」は存在するため、本稿では「家庭で使用する言語」を指標として採用した。
- 5) 前掲4) にも関連するが、「家庭で使用する言語」という指標では、家庭で英語を使用する日本人やインド人などを抽出することはできない。エスニックグループを特定するには、親の出身国や宗教など他にもいくつか指標が考えられるが、本稿では言語に着目した。

- 6) 4 Digit Levelのデータでも、本稿の地理行列は60万セル以上に及ぶ膨大なデータである。テーブルビルダーでは、502種類まで詳しく分類・集計された4 Digit Levelのデータも集計は可能ではあるものの、統計上の「非分類」やデータのエラーが多くなってしまう難点がある上、各統計区の集計人数が0や数人程度にまで減ってしまうため、地区間の比較などには適さない恐れも生じる。

文 献

- Burnley, I. H. (2001) : *The impact of immigration on Australia: A demographic approach*. Oxford University Press.
- 堤 純 (2012) : メルボルン大都市圏における通勤特性－オーストラリア国勢調査「テーブルビルダー」データを利用して－. 統計, 63(2), 19-25.
- 堤 純 (2013) : シドニーとメルボルンにおける都市社会の多様性－地理情報システム (GIS) を用いた分析の可能性－. オーストラリア研究, 26, 37-48.
- 堤 純 (2014) : 使用言語からみた社会経済特性の差異－大都市シドニーのジェントリフィケーション－. 統計, 65(6), 42-45.

